

こんな私でも救われた4



ジーザスコミュニティー国分寺牧師
桜井知主夫

テゼ共同体の創始者 ブラザー・ロジエ

テゼ共同体は、ブラザー・ロジエによって創立されました。彼は、スイスの神学校を卒業すると、母親の故郷であったフランスを自転車で旅行しました。旅の途中、テゼという村を訪れた際、住民から「私たちの霊的指導者になってほしい」と頼まれ、以来、天に召されるまでそこが彼の住処すみかとなりました。

第二次世界大戦が始まると、ナチス・ドイツの迫害から逃れてきたユダヤ人や他の地域からの難民が、この共同体に助けを求めやって来ました。ブラザー・ロジエは彼らを自分の故郷であるスイスへと逃し、彼自身もナチから逃れてスイスへ一時避難しました。

戦後、テゼには、ドイツ敗残兵の収容所が作られました。テゼのブラザーたちは、共同体で採れた野菜をドイツ兵にも分けて

いたので、フランス人からは強く非難されました。

一九六〇年代になると、若者の間で、テゼ共同体のことが口コミで広がり、ある夏には一日に五千人ほどが集ってくるようになりました。そこでは、戦後世代のフランス人とドイツ人が和解し、それ以来、多くの人の和解と祈りの場となっています。そして今でも、世界中からキリストとの関係を深めるために若者が押し寄せているのです。

「もう二週間 ここにいなさい」

さて、私もフランスのストラスブルグで出会った韓国人の神学生に勧められ、テゼ共同体に向かいました。そこで、スイス人のルイジと仲良くなりました。彼は街角でクラリネットを演奏し、小銭を稼ぎながら旅を続けていました。彼と、意気投合して「スペインをヒッチハイクで周ろう！」



ということになりました。

ある晩、テゼの夕拝で祈っていると、誰かに肩を優しく叩かれました。振り返って見ると、ブラザーの一人が手招きし「私について来なさい」と言うのでついて行くと、森の中にある小屋に辿り着きました。中に入ると、一〇名ほどの若者を前にしてブラザー・ロジェが話していました。その場に招かれたのは、神の導きでした。なぜなら、三年後に再び、ブラザー・ロジェと劇的な再会を果たすことになるからです。

テゼで三日間を過ごし、ルイジと私は丘の下にあるバス停に向かいました。彼に

は先にバス停に行ってもらい、ブラザー・トマスに挨拶に行きました。すると彼は、私の目を見据え「あなたは、もう二週間ここにいる必要がある」と言う

のです。一瞬パニくりしましたが、「一生のうちには、こんなチャレンジをしてくる人は何人いるだろうか」と、私の頭は激しく回転し、次の瞬間「このオフアアを受けるべきだ」という結論を下したのです。

バス停で待っていたルイジに事情を説明すると、「えっ嘘だろ！」と反応しましたが、すぐに理解してくれて、後に再会することができました。一方のブラザー・トマスとは、翌日から毎朝食後の一時間ほど、じっくりと語り合う時間が与えられました。

「あなたは、何をしていますか？」
「ロンドンから北京まで旅をして知り合いを作り、その彼らに知り合いを紹介してもらい、北京まで旅を進めて行きます。」
「それをしてどうするのですか？」
「写真を撮り、ジャーナルを書いて、本を出版しようと思っています。」
「なるほど。で、本を出版してどうするのですか？」
「有名になります。」
「有名になってどうするのですか？」

この質問をされた途端、旅を続けている動機であった自己実現という燃料が、ドボドボとこぼれ落ち、燃料がなくなった私は旅を続けられなくなってしまいました。ブラザー・トマスとの出会いは、「自己実現コース」から、「キリスト実現コース」へと大きく舵を切るきっかけになったのです。

旅を断念し、 帰国して仕事を始める

実は、私はそのとき婚約していました。二年間の約束で、彼女を日本に残し旅を続けていたのです。彼から「日本に帰って婚約者との関係をどうにかしなさい」と促され、七か月目にして、その旅行を断念しました。

母親に国際電話で「旅をやめて日本に帰る」と伝えると、「結婚したら二度とそんなことはできないんだから、旅を完結して帰って来なさい」と言われましたが、私の腹は決まっております。帰国しました。未だ



にこの決断に後悔はありません。神の導きだったからだと思います。旅では、タリバンが支配するアフガニスタンを通過する予定でした。そのまま旅を続けていたら、当時、ソ連と戦争をしていたアフガニスタンで死んでいたかもしれませぬ。

帰国すると、一九八〇年代当時、広告業界で成功していたアートディレクターたちに片っ端から連絡をとり、自分売り込みました。そして、すぐにフリーのカメラマンとして仕事を始めたのです。当時はパブルの真っただ中で、仕事は豊富でした。「流行通信」や音楽雑誌、広告などの仕事で、芸能人やプロのミュージシャンをスタジオで撮るようになりました。写真雑誌「PHOTO JAPON」で、ルーキーとして私

の作品の特集が生まれ、私の上昇志向に再び火が付ききました。

神は、仕事の面でとても恵んでくださいました。しかし、私は、神に感謝するどころか、これは自分の精力的な売り込みのおかげだと勘違いしていました。まさに「神を知っていないながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず」（ローマー・21）という心の状態だったのです。

一方、婚約者との関係は、お互いの自我がぶつかり、苦悩する機会が増えていました。そして、最終的には婚約破棄へと向かいました。プライベートがうまくいかず、徐々に私の生活に暗い陰が忍び込み、私の心は何か縛られるようになっていました。

夢の中で、キリストが声をかけてくださる

そんなころ、アメリカで悪霊に憑かれたときに祈ってくれた牧師が、実家に泊まりに来ました。彼が祖父の教会を訪ねたい

というので、車で送って行きました。私にとって久しぶりの教会訪問でした。

教会のホールで牧師が用事を済ませるのを待っていると、突然からだの力が抜け、ヘナヘナと床に倒れ込んでしまいました。すると、また腹の奥底から熱いものが上ってきたのです。それが、喉元あたりに来たとき、その言葉の内容が分かりました。「これはやばい。自分のプライドが傷つく内容だ。言いたくない」。しかし、それを阻止することができず、「愚かだった」という言葉が口から出て来たのです。この言葉は自分の意思ではなく、腹から出て来たのです。私はプライドが傷ついたまま家に帰りました。

